

## 川柳における自己対象化と自己相対化～逆境を生き抜く知恵～

### Self-objectification and Self-relativization in Comic Haiku

#### ～Wisdom overcoming adversity～

大谷 孝行

OTANI Takayuki

川柳は現代の日本でも人気のある文芸である。川柳が現代でも流行している理由について、人生の悩みを軽減するという点に着目し、それを自己対象化と自己相対化という点から論じた。現代の様々な分野で愛好されている川柳の秀句を取り上げ、それがどのように自己対象化と自己相対化という点で作詩されているかを考察した。

私たちは困難な問題にとらわれているときには、そのままならなさに頭を悩ましていくことになる。その際、問題を抱えている自分を対象化し相対化しえた時、人はその問題を乗り越えていくきっかけをつかむことになる。笑いの要素を含む川柳によって自分の問題を対象化し相対化できれば、悩みへのとらわれから脱却して、その悩みを含めたままならない自分の人生を受容することにつながっていく。

キーワード：「川柳」、「笑い」、「悩み」、「自己対象化」、「自己相対化」

### はじめに

江戸時代に端を発する川柳という文芸は、平成の現代においても多くの作品がつけられ、その精神は庶民の間で脈々と受け継がれている。川柳の近づきやすさは、短詩形であるために誰でも作詩でき、すぐに鑑賞できる点にある。そうした手軽さのために、現代の日本では様々な分野で川柳が作られている。現代川柳において人々の関心を高めた嚆矢的存在であるサラリーマン川柳をはじめ、シルバー川柳、介護川柳、さらにはホームレス川柳や心的な障害に悩む人の川柳など、枚挙にいとまがない。<sup>(1)</sup>

本稿では、現代の日本で民衆に愛されている川柳という文芸を、主に自己対象化と自己相対化という視点から考察することにより、川柳の素晴らしさを明らかにしたい。ままならぬ人生をたくましく生きていく知恵としての川柳に学び、人生で笑いを忘れないことの大切さをこれらの視点から再確認し、川柳の知恵を再評価できればと思う。<sup>(2)</sup>

### 1. 現代における川柳

ストレス社会と言われる現代の日本において、強いストレスをいかに和らげ人生を歩んでいくかということは、多くの人にとって重要な課題である。怒り、恐れ、不安などの強い感情におそ

われているときは脳の扁桃体が活性化しており、そのような状況において感情に振り回されないためには、理性を働かせて扁桃体の暴走にブレーキをかけることが求められる。

現代社会においては「便利さ」、「速さ」、「効率性」、「快適さ」という価値を実現すべく時代は突き進んでいく。しかしそうした価値観だけを至上のものとしていては必ず行き詰まる。例えば高齢化という現象一つとってみても、人は歳をとるにつれ動作が緩慢になり、必ずしも効率的な動作をするとは限らなくなり、速さや効率性から遠ざかっていく。また、上記の価値観を実現したからといって、それが人間にとって幸せな状態であるかどうかとも即断できない。速さと効率性を絶対的な善とすれば、遅いことは欠点となり、社会は待てない社会となってイライラ感が広く蔓延する社会になりかねない。

日本において今後さらに進展していく高齢社会で求められる価値観、人間観とはどのようなものであろうか。お年寄りが増えることによって生じる様々な問題を、「〇〇ができて当たり前」という常識的で真面目な視点からだけ捉えることには限界があるのではないだろうか。肩の力を少し抜いて人生を楽しむ姿勢を忘れず、お年寄りの言動を捉え返すという視点が不可欠であるように思われる。

例えば、哲学者のアルフォンス・デーケンによれば、人間に接するのにも機能的アプローチと人格的アプローチがある。<sup>(3)</sup> 機能的アプローチとは、機能や利用価値で人を見る視点であって、例えば本屋の店員は「本を売る」という機能を果たせばよく、その人の人格は問題にならない。「彼は使えないヤツだ」という言い方は、人を機能的アプローチから見た評価である。一方で、人格的アプローチとは、その人が何かに役立つかどうかでなく、その人そのものを価値ある存在として見る。ドイツの哲学者カントが人間の人格そのものを常に目的として扱うことを説いたことに通じる視点である。<sup>(4)</sup>

先に述べた効率性や速さという点から人間を評価するのは機能的アプローチからの視点であるのに対して、人格的アプローチとは、人間そのものに対して価値を置く視点であり、緩慢で非効率的な動作をする人の価値も尊重される人間観である。

スピードや効率性を求められる社会にあっても、当然のことながら自分の思い通りに万事、事が運ぶとは限らない。そのままならない人生の状況を、川柳の場合は理性を働かせながら五・七・五という枠の中で詠み、さらには自分を笑い飛ばすこともできる。

川柳は俳句と同じく、五音、七音、五音の計十七音で構成される世界で最も短い詩であり、しかも俳句のような季語による制約がない。作ろうと思えば誰もが作ることができ、鑑賞することも即座に可能である。それに加えて、現代の日本では短文で表現する情報ツールが浸透しており、これも川柳の流行を後押ししている。現代において川柳が流行する理由の一つとして、「若者を中心に SNS やツイッターを使って、短い文章で自分を表現する短文文化が浸透してきたことが背景にあるのではないか」<sup>(5)</sup> との分析もある。手軽に作品を作れ即座に理解できるというのは、何と言っても川柳の魅力であろう。

我々が人生で逢着する問題に悩み、とらわれるのは、その問題の解決が極めて難しいか不可能であるという「ままならなさ」にある。そのままならない人生の状況を、どのような思いで見ることが、心理状態や視野の広狭に影響してくる。ユーモアは様々な定義されているが、人生のままならなさという点からの視点として、文学者の矢野峰人の定義は参考になる。

「ユーモアは、人生の馬鹿らしさ、おかしさに直面しながら、これを憎む事の出来ない場合に生じる心状である。それは、人生の馬鹿らしさを馬鹿らしく感じない事でもなく、不合理的を不合理と感じない事でもない。唯、それを、濫りに責めず憎まず、一種憐憫の情をさえ籠めて眺める心である。」<sup>(6)</sup>

川柳に詠まれている題材の多くは、色々な点で作者が馬鹿らしい、不合理だと感じているものである。しかし、その題材を作者がただ憎み嫌うというのではなく、それを人生の一コマとして受け入れようとする姿勢が伺える。

心身の健康に効果あるものとして笑い療法は今後も益々実践され、人々は笑いによってストレス発散を図ることだろう。川柳が創始された江戸時代、体制に対して直接批判できない庶民が体制批判的な川柳によって溜飲を下げたのもストレス解消であり、平成の現代の川柳において作品に自分の境遇を重ねて「あるある」と納得するのもストレス解消であるとともに、孤立感をやわらげる一助になる。<sup>(7)</sup>

心の悩みを軽減する、いわゆる精神療法には、認知行動療法、音楽療法、日記療法など様々なものがあるが、認知行動療法であれば、それなりの時間とノウハウの習熟が必要である。音楽療法は音楽を鑑賞すればよいので、その点では実践しやすいが、自分で作曲となれば万人にできるわけではない。日記をつけるのも習慣化する前に三日坊主で終わってしまう可能性がある。そういった点からも、誰にでも作成でき、即座に鑑賞できる川柳は、簡便さという点で大いに優れている。

あわただしいテンポで動くことを強いられ、心の余裕を失いがちな現代社会にあっては、ユーモアを忘れずに心の余裕を保つことは心の健康にとってひじょうに大切なことである。森田療法家の高良武久は、健康な心の特徴として以下の7つを挙げている。①建設的な作業を続けられる、②ものごとをあるがままに見、あるがままに判断できる、③他人に対して愛情をもつことができる、④自制心、反省心をもつ、⑤自分の行動に責任をもつ、⑥精神的弾力性があって融通がきく、⑦ユーモアを解し、人生を楽しむゆとりがある。<sup>(8)</sup>

川柳を作ったり鑑賞したりして川柳に親しむことは、以上の点に照らしても、現代人の心の健康に多大な貢献をなすことは容易に想像できる。人生において自分の思い通りにいかぬままならなさを徒に憎み悲観するのではなく、そうしたままならなさを含めて自分の人生の一部として受け入れ前進していこうとするたくましさも備えていることが、川柳の魅力の一つである。

## 2. 笑いにおける自己対象化

現代の日本は笑い文化が盛んである。毎日のテレビ番組ではお笑い芸人たちが大活躍であり、漫才、コント、一人芸人のコンテストは毎年ゴールデンタイムに放送され、伝統的な落語を扱った番組も見られる。お笑い芸人たちは笑いの技術において日々切磋琢磨し、それぞれのジャンルでレベルアップを図っている。<sup>(9)</sup>

笑うことが心身の健康によいことは様々に喧伝されていて、今や常識と化した感がある。医療の分野では、笑いを積極的に病院に取り入れたり、遺伝子レベルで笑いの効果を測定する動きもある。<sup>(10)</sup>

時には苦悩、怒り、悲しみなどの感情に襲われるのが人生だが、いつまでもそうした感情にと

らわれているわけにはいかない。悩みの原因を考えて解決しようとするか、それともあえて放置するかによって、我々は悩みや怒りからの解放を図る。

強い感情からの脱却法の一つが、自分の状況を冷静に対象化するということである。例えば、自分の感情をコントロールしていく手法の一つに、バルコニー法と呼ばれるものがある。怒りなどの感情にとらわれた自分を、もう一人の自分がバルコニーから眺めるつもりで距離をとって自分を対象化する。強い感情にとらわれているときは視野狭窄に陥りがちなので、そのような状況であえて自分を突き放し、自分を対象化するのである。

長年、日本笑い学会長を務めた井上宏は、池澤夏樹のコメントを紹介するかたちで、自分を客観視することの大切さを以下のように述べている。

「平穏な日々をのんびりと暮らしている人は、ユーモアというのは人生の表面の飾りだと思っている。なければならぬで済むけれど、あれば楽しいぐらいに考えている。しかし、本当に生きるか死ぬかの窮地に追い詰められた者にとって、ユーモアは最後の拠りどころ、命綱、緊急脱出装置になる。そういう場合、大事なことは自分が置かれた立場を客観視することだ。自己にしがみついているかぎり、身に迫る危険ばかりが視野を占領して、周囲との関係は見えなくなる。この金縛りの状態を抜け出すために、自分を笑うという姿勢は役に立つのだ」<sup>(11)</sup>

自分を対象化し、しかも対象化された自分を笑う。その笑い方にも、笑い飛ばすか、密やかな憐れみを感じながら笑うかなどの違いはあろうが、自分の悩みを客観化して、冷静に見ようとする姿勢は共通である。そして川柳においても、自分を対象にして笑う作品は定番である。

「にっこり笑った後、目頭がじ〜んと熱くなる、こんな句がユーモア句だと岸本水府は言っています。このような句は自分を笑った句に多いものです。・・・作者自らが自分を追い詰め、真剣に、深刻に悩み苦しむ、その姿に読者も己の姿を重ね合わせて共感するので。・・・自分の姿を、心を厳しく見つめ、己に隠れ棲む悪、弱さ、見苦しさ、狡さ、危機感、緊張感を率直に表現するのが川柳です。」<sup>(12)</sup>

言語を使って何かの作品に仕立てることは、自分の思いを対象化することである。感情にとらわれている時は、自分の状況を言語によって客観化することが、とらわれからの脱却にとって有効である。たとえ自分の辛い体験であったとしても、それを作品にすれば、その体験も決して辛いだけの経験でなくなり、作者にとっては形をえた作品となる。作品に昇華されることで人生の辛い体験も意味をもち、その意味では無駄な経験など存在しないことになる。

自分の失敗や欠点、弱さをも認め、それらも含めたトータルな存在としての自分を対象化する。プラス思考で笑うと言っても、人間の弱点や愚かさ、人生の悲哀、不条理さなどを無視するというお気楽なものではない。自分の至らなさや人生の不条理さという、いわば負の側面を自覚した上で、その側面も含めた全体としての人間を肯定する人間観である。

ドイツで一番有名なユーモアの定義は「ユーモアとはにもかかわらず笑うこと」<sup>(13)</sup> であるという。この定義は人生における明るい側面ばかりでなく、不条理さやままたらなさにも目を向けており、不条理なことやままたらないことが人生では必ず起こるという前提に立って、それでもなお笑うことを忘れない姿勢をユーモア精神と定義しているところに眼目がある。

「健康で明るい友をさけたい日」<sup>(14)</sup>

人間は他者ばかりでなく、自分をも笑いの対象にすることができる。笑いの対象が他者である場合は、ときに嘲笑のように攻撃的に作用する場合もあるが、笑いの対象が自分であれば、それは自虐であり謙遜にもつながりうる。他者の薄毛を笑えば喧嘩になるかもしれないが、自分の薄毛を笑えば、それはお笑い芸人のネタにもなる。その場合、自虐といっても卑屈な卑下ではない。いつまでも失敗などにこだわってクヨクヨするのではなく、自分を笑い飛ばして突き離し、前進するきっかけになる笑いである。

自虐の視点で詠まれる川柳の中には、自分個人というレベルにとどまらず、日本人としての特徴を表現し対象化した作品も数多く見られる。よく知られる川柳「赤信号 みんなで渡れば 怖くない」という句は、集団主義に走ってしまいかねない日本人の特徴をとらえている。

国際化が叫ばれて久しいが、相変わらず英語力に自信のもてない日本人を風刺して、

「聞かれればいつでもファインの英語力」<sup>(15)</sup>

「外人の英語はどれも聞きづらい」<sup>(16)</sup>

一時期流行った「癒やしブーム」に対しては、

「なぜそんな癒やしされたがる日本人」<sup>(17)</sup>

これらの句は、自分もその一員である日本人全体を対象化してその特徴を的確に描いている。その描写が鋭く本質に迫っているから皆の共感をえられる。一見意表をつくような表現であっても、内容のもつ説得力に「なるほど」とうなずいてしまい、しかも笑ってしまうような内容をもつ句である。

### 3. 笑いにおける自己相対化

強い感情にとらわれ辛い状況に埋没しているときに必要なことは、自分のおかれた状況を冷静に対象化するとともに、自分を少しでも相対化することである。悩みにとらわれているときは、トンネルの中にいるかのように視野が狭窄化し、悩み以外のことになかなか目が向かないのが一般的である。本人にとっては自分がとらわれている悩みは絶対的であり、自分こそが一番苦しいという考え方に陥りがちである。

高良武久は森田療法の対象になる神経質症状をもった人の特徴として、自分が苦しんでいることを過大にとらえてしまう傾向を指摘し、それを「部分的弱点の絶対視」と呼んでいる。<sup>(18)</sup> さらに高良は、とらわれやすい人は「劣等的差別観」に陥りやすく、劣等感にさいなまれて自分を特別視してしまいがちであり、この差別観のとらわれから脱することが、症状を克服する上で大切であると説く。

「神経質症状をもつ人々の多くは、自分ほど苦しいものはない、こんな症状をもっている者はほかにあるまいと思いでいる。だから、他人の症状を聞いてもいっこうに同情しない。」<sup>(19)</sup>

相対化の対極が絶対化であり、悩みにとらわれているときは自分こそが一番苦しいのであり、周りの人間の苦勞など視野に入らない独我論的な状況に陥る。自分だけという考えが負の方向に向かうと孤立感にもなり、自分の悩みを絶対的なものにしてしまう。

ノイローゼを克服する方法の一つが、自分の他に同じ体験で悩んでいる人の存在を知ることであるのも、自分だけではなかったと知って安堵し、自分の絶対的な悩みが相対化されるからであ

る。その意味では、現代日本の情報ツールに乗って、他者の作った川柳に自分も「あるある」と納得して孤立感を和らげているというのは、川柳の大きな可能性である。

では実際にどのようにして自己を相対化することは可能なのか。どうすればとらわれた自分を乗り越えていけるのか。自分を相対化するためには、自分の置かれている状況を外から眺めることが必要であり、そのために有効な方法が、自分と他との比較である。

時間軸でいえば、例えば昔の人々の暮らしぶりを挙げ、現在の自分と比較することで、自分を相対化できる。

「あわてんな 昔はみんな 歩いてた」<sup>(20)</sup>

現代がストレス社会である理由の一つは、現代がスピード礼賛のせわしない社会であり、待てない社会になっていることによる。上記の川柳が現代人に一種の安堵感を与えるのは、いつの間にかスピードに踊らされている自分の生き様をふと見つめ直す機会を与えてくれるからである。

昔の自分を思い出すということも、時間軸における自分の相対化である。人はその時その時の現在を懸命に生きており、その時直面している問題や悩みは圧倒的な威圧感をもって立ち現れるが、時の流れはその深刻さを軽減してくれる。現在の絶対的な悩みも、「待つ」ことによって時間の流れの中に送りこまれることで悩みが相対化される。

「悩んでた自分が今はなつかしい」<sup>(21)</sup>

空間軸での相対化としては、同じ時代でも所変われば品変わるというように、他国や他の地域での生活習慣や風習を取り上げ、自分の生き方と比較して省みることである。海外旅行や留学によって、自国の文化や風習を改めて見直すのも相対化である。自己を相対化するという場合に、その自己は、〇〇県民である自分、〇〇地方出身である自分、〇〇国籍である自分というように、様々な特性を担っている。先に述べた日本人の特徴を詠んだ川柳も、他国と比較する視点をもつことで自己相対化という要素を含む句になる。

地方的特性の一つである日本の方言が、外国のメルヘンと並べられることによって滑稽さを生んだ秀句として、

「ばあちゃんのシンデレラ 姫駿河弁」<sup>(22)</sup>

海外に出て諸外国と自国を比較することにより、日本の良さを改めて認識することも可能になる。日本における日頃の当たり前の生活を有り難いと思う句。

「お茶づけがこんなに旨い 異国の地」<sup>(23)</sup>

「平和ボケ いったいどこが悪いのか」<sup>(24)</sup>

相対化は人間という枠の中での相対化にとどまらず、人間そのものを相対化することもできる。人間の存在を有限なものとして相対化したり、愚かしいことになってしまう人間をアホな存在として相対化したりすることで、人間である自分の悩みも相対化する。人間としての自分を相対化する視点をもてる人は、優れたユーモア精神をもつ人である。<sup>(25)</sup>

人間そのものを相対化するためには、人間以外の動植物や機械などを取り上げ、それらの視点に立って人間の言動を捉え返すという方法がある。動植物からの視点を組み入れて詠んだ句が以下である。

「クマがいたクマにしてみりゃ人がいた」<sup>(26)</sup>

「生き物にはやり廃りがあるなんて」<sup>(27)</sup>

「人間に見つかっちゃって新種なり」(28)

人間とペットを対比させることで生まれる滑稽さもある。動物と同等に並べられた人間と、擬人化された動物との取り合わせによって生まれる面白さである。

「パスポートないのはパパとネコのトラ」(29)

「携帯が鳴るとろつく父と犬」(30)

本来人間が使う立場のはずの機械によって、逆に人間が使われたり振り回されたりする人間疎外の現象を詠んだ句としては以下の川柳を。AI(人工知能)が今後さらに発展していくことが予想される社会で、こうした句は多く詠まれていくことだろう。

「パソコンに不正呼ばわりされている」(31)

「多いほどよいのだろうか情報は」(32)

人間の愚かしさ、駄目さぶりを表現することも、人間の相対化である。万物の霊長と称される人間は地球で絶対的な強者として君臨してきたが、そんな人間もアホなもんだという視点である。例えば人間の限界として、我欲にとらわれてしまう人間への風刺的な視点は江戸時代の昔から存在した。以下の川柳は、物欲にとらわれた人間を批判的に詠み上げていて絶妙である。

「泣き泣きもよい方を取る形見分け」(33)

「わっわっと泣いて形見を持って行き」(34)

その物欲の根源である所有という概念が錯覚であると論じているのが松井孝典である。松井によれば、所有というのは大脳の錯覚であり、例えば人間が土地を所有するというのも真実でなく、真相はむしろ人間が地球上で生きている間、人体をはじめ生きるのに必要な素材を地球からお借りしているというレンタルのあり方であると論じている。(35) そのように考えれば、欲望を満たすことに汲々とする我々の人生は、所詮一時の夢のようなものであるという見方も可能だろう。我欲を優先させてしまう人間は、歴史的に見れば、欲望を満たすために突き進んだ結果、環境問題を引き起こした人間でもある。環境破壊の主たる当事者である、そうした人間のエゴを描いた作品が以下の川柳。

「焼却場反対するがごみは出す」(36)

「人間がいなくなっても地球です」(37)

皆、等しく最後は死に、土へと帰っていくのが人間存在であり、人生の勝ち負けなどという二元論は存在しないのではないかと問いかけ、人間の一生そのものを相対化することもできる。

「人生に勝つって一体どんなこと」(38)

笑いが自分を相対化するという場合、相対化される自分は「真面目で型通りの思考に陥っている自分」でもある。思考が柔軟性を失い紋切り型の思考しかできないということは、いつの間にか視野を狭め何かにとらわれてしまう可能性が高い。人生には様々な危機が訪れるが、その危機の一つとして「真面目になりすぎる危機」を指摘するのがデーケンである。(39)

私たちは普段、暗黙のうちに「ああすればこうなる」という常識や予想の中で生きており、そのルールのもとに考え行動することが真面目とされる。笑いは真面目一辺倒になっている思考に揺さぶりをかけ、自分の思考を相対化し、他の考え方もありうることを示唆する。笑いの本質的特徴の一つである「ズレ」とは、常識や予想からのズレであり、真面目さからのズレである。

「夕食はビーフシチューよ豚肉の」(40)

「女房のネグリジェ着て寝てなぜ悪い」(41)

ユーモアのある人は自分を広い視野から眺め、自分が局所的なことにとらわれていることを自覚できる人である。さらには、そのように自分を相対化しつつも、なおその部分的なことにこだわらざるをえない自分をあえて肯定するという句もある。相対化された自分に限界を感じながら、そうした限界を負った自分を許容しようとする態度である。

「壮大な宇宙を見ても痔は痛い」(42)

「今日も見て低俗だなあと次も見る」(43)

「煩惱って何の役にも立たないの？」(44)

「たかが～」と自分を相対化しつつ、「されど～」とそれにこだわらざるをえない自分を許容し描いてみせる。一種の開き直りともとれなくはないが、上記の川柳は誰もが共感しうる説得力をもっている。

#### 4. 「ままならなさ」を乗り越える知恵としての川柳

私たちが人生で行き詰まっているときは、悩みにとらわれ悩みを絶対的なものと感じて無力感に襲われているときである。悩みを消そうとすればするほど悩みを増すばかりという堂々巡り、悪循環に陥る場合もある。(45)

自分の努力によって解決できる悩みであればよいが、真面目に努力しただけではすぐに解決しない問題もあるだろう。解決しようと真面目に考えれば考えるほど悩みが深くなるようなことに対して、それを笑い飛ばしたり、別の視点から眺めることで笑いに変えようとする川柳は、苦悩の多い人生を前進していく知恵である。

「笑わなければやってられない」という言葉がある。困難の度合いが大きいときに、むしろそれを笑い飛ばしてしまおうという態度である。笑い飛ばすことが難しければ、せめてクスッとでも笑うことによって、とらわれた心に少しでも風穴を空け、すき間を作ることが大切である。

「大阪商人の間では、昔から『不景気になると寄席が流行る』と言われてきたし、『泣いている暇があったら、笑うてこませ』という言い方もある。駄目だということを、寝ても覚めても思い続けるのではなく、大いに笑ってみたら、少しは『自分離れ』を起こすことができ、心にゆとりを持つことができると教えているわけだ。固定した観念を突き放し、複眼的に見る目を獲得するに至ると言ってもよい。そうすれば、立ち上がるチャンスに恵まれるかもしれない。」(46)

もはや日本の文化として定着した感のあるサラリーマン川柳には、職場や家庭でままならないサラリーマンの悲哀を扱っている作品が多い。以下に、思い通りにならない職場での人間関係や待遇を詠んだ秀句を挙げる。自分の真面目な努力だけではどうにも解決できない「ままならなさ」が伝わってくる。

「成果出せお前がいなけりゃ成果でる」(47)

「残業がサービスならばチップくれ」(48)

「重役と話が合ってくたびれる」(49)

「汚職する地位に中々届かない」(50)

『早くやれ』そう言うことは早く言え」(51)

「ブリはいい！生きてるだけで出世する」<sup>(52)</sup>

同じくサラリーマン川柳において、家族間の人間関係でままならない状況を詠んだ秀句を以下に紹介する。父親としての威厳は全く感じられず、家庭で優遇されない自分を詠んだ句である。

「風呂の順オヤジ最後で掃除つき」<sup>(53)</sup>

「遺伝子を組みかえたいと子に言われ」<sup>(54)</sup>

「はいします家と会社の共通語」<sup>(55)</sup>

「耐えてきたそう言う妻に耐えてきた」<sup>(56)</sup>

「そつと起きそつと出掛けてそつと寝る」<sup>(57)</sup>

「できるなら女房初期化してみたい」<sup>(58)</sup>

ままならないことや不条理だと感じることに對して、ただそれらをプロテストし糾弾するのではない。それらを人生の敵として排除しようとするのではなく、仕方ないかと許容していく姿勢がうかがえる。その姿勢はまさに、悩みの種を徒に取り除くのではなく、とにかくもそれと共存していこうとする「あるがまま」の姿勢というノイローゼ克服法に通ずるものがある。

介護川柳では、苦勞の多い介護経験の中にも微笑ましいエピソードを見つけ作句につなげている。真面目な姿勢だけでは行き詰まってしまう介護体験を、笑いの視点から捉え直すことによって、少しでも心の余裕につなげていく。介護の場面で見られるお年寄りたちの言動における常識からのズレや、お年寄りとの関係のなかで展開される介護者の言動における笑いのネタを楽しむとする姿勢が感じられる。

「義母を抱く アラカン決死の 及び腰」<sup>(59)</sup>

「啄木の ようにはゆかぬ 母メタボ」<sup>(60)</sup>

「紙おむつ 濡らしじいちゃん 九条説く」<sup>(61)</sup>

「抜き返す 車イスでも 血が騒ぐ」<sup>(62)</sup>

「寝たきりの 母に姿勢を 注意され」<sup>(63)</sup>

『「なんでやねん」 わろてあきれて 『まあ、ええか』』<sup>(64)</sup>

シルバー川柳は、概して否定的にとられがちな老いという現象を笑いの点からとらえ返す。一般的に老いとは、それまでできていた何かができなくなっていくというマイナスの視点から見られがちであろう。辞書によれば、「老いる」とは次のように定義されている。「①年よる。年とる。また、その結果、心身が衰える。②植物などが衰える。弱る。枯れかかる。③（時候が）末になる。」<sup>(65)</sup>

しかし、老いの中にこそ実は常識からのズレという笑いの本質が潜んでおり、川柳の格好の題材となりうる。筆者は、とかく否定的にとられがちな老いを、笑いという視点からとらえ返したことがある。筆者の再定義によれば、老いとは以下ようになる。<sup>(66)</sup>

- ① 常識や予想を見事にくつがえす笑いの神髓を自然に發揮する人
- ② 間違いや失敗の体験を、ときにはその自覚さえも乗り越えてしまい、見事に克服する人
- ③ 現代の至上価値とされるスピードと効率性に敢然と立ち向かい、己の信条とするスローペースとゆとりを対峙させる人

以下にシルバー川柳の秀句を掲げる。ままならない心身の能力の衰え、いかんともしがたい認知機能の低下を、見事に笑いに変えている句が多い。

- 「改札を 通れずよく見りゃ 診察券」(67)  
「誕生日 ローソク吹いて 立ちくらみ」(68)  
「万歩計 半分以上 探しもの」(69)  
「カード増え 暗証番号 裏に書き」(70)  
「目には蚊を 耳には蟬を 飼っている」(71)  
「立ちあがり 用事忘れて また座る」(72)  
「留守電に ゆっくりしゃべれと どなる父」(73)  
「いざ出陣 眼鏡補聴器 義歯携帯」(74)  
「しーあわせは 三步進んで 二歩よろけ」(75)  
「久びさに スカートはいて 風邪をひく」(76)  
「おどけ婆 『<sup>ぼあ</sup>孕<sup>はら</sup>んだみたい』 爺<sup>じい</sup>黙る」(77)

詠まれている内容それ自体は、何かができなくなったなど、たしかに能力の減退を扱っているのだが、それを笑い飛ばして許容する姿勢がある。老人の言動に笑いの要素を見出すといっても、それは老人を蔑視したり馬鹿にしたりするわけではない。その言動の中にある、常識や予想からのズレを純粋に楽しむのであり、老人に対して微笑ましさや共感を感じこそすれ、嘲笑や冷笑して笑うのではない。

人生が思うに任せずホームレスという境遇になった場合でさえも、人間はそのままならない状況を川柳で表現することができる。どん底の境遇にあっても、なおその状況を川柳に仕立てあげるといふ姿勢には、感嘆の念を禁じえない。

- 「寒いけど 大地に抱かれ 眠りつく」(78)  
「めまいする 立ち読みはじめて 八時間」(79)  
「目が開けば 飛び込んでくる 青い空」(80)

精神的な障害で苦しむ人が、川柳によって自分を笑いの俎上に乗せるということもある。一例を挙げるならば、いわゆる神経症の治療法として知られる森田療法を生涯学習として学ぶ組織として、NPO 法人「生活の発見会」があり、この会が発行する『生活の発見誌』では、神経症の中核である「とらわれ」をテーマにした川柳が数多く掲載されている。神経症の様態は、常識的な行動とズレていることが多く、その意味では笑いの要素を含んでいるからである。例えば、毎年、『生活の発見誌』の1月号では特集として、神経症状を詠んだ川柳が数多く掲載されており、悩みにとらわれている人たちが、自分を見つめるとともに自分を笑いとばす一助となっている。ノイローゼを克服する方法の一つは、自分の他にも同じ体験で悩んでいる人の存在を知ることであるので、そうした川柳に接することは、現に悩んでいる人たちの救いになる。

森田療法の本質は「あるがまま」の体得にあると言われる。「あるがまま」には、悩みにとらわれている人が自分の辛い状況に対して感じる「ままならなさ」が表裏一体のものとして含まれている。なぜならば、森田療法の対象になる人たちは、悩みを消そうとすればするほど、逆に悩みにとらわれていく悪循環を体験しており、自分の心理が自分でも思い通りにならないことを、嫌というほど経験しているからである。

悩みの種はたしかにあるのだが、それを徒に消そうとせずに、自分がなすべきことに注意を向け活動していくのが森田療法の基本姿勢である。人生の困難に会ったとき、それを「ある」まま

にしておかなければならないことは色々とある。なんとか解決して悩みを消せばよいが、それができない場合、悩みの種は当面「ある」ままにしておくしかない。

この森田療法の考え方は、精神的な障害で苦しむ人の治療法という範囲を超えて、広く一般人が人生を歩んでいくときにも大いに参考になる。悩みの種にいつまでも注意をむけて悩みを頭の中で絶対化するのではなく、また、「これさえなければ」と徒に敵視してクヨクヨするのでもない。悩みの原因はあるにしても、他のやるべきことに注意を向けたり、人生を少しでも楽しもうとする意志をもち、笑うことを忘れない姿勢が、ままならない人生を歩むときには必要であろう。

「人を救う笑い」とも言われるユーモアの笑いの場合、笑いの対象は敵視・異物視されているのではなく、笑いに伴う快の感情によって、それとの共存が促進される。職場や家庭でのままならなさ、老いという現象、とらわれの原因となる不安など、これらは人生にあってはならない異物なのではない。これらに対して少しでも笑いの要素を見出すことができれば、私たちはそれと共に生きていく「あるがまま」の態度を取りやすくなるだろう。

その意味でも、万人が程度の差こそあれ日々感じている人生の「ままならなさ」を笑いの対象にして、人生を前進するための推進力に変えられる川柳は、やはり素晴らしい文芸である。色々と悩みが尽きない人生ではあるが、それでも根底のところでは人生を肯定し、人生に YES と言い、人生を楽しむ意志をもち続ける。人生の幕引きをするときも、生まれてきてよかったと自分の人生を肯定することができる。人生万歳、人間万歳という気持ちを持つことにつながる川柳を、私たち日本人は今後も大切にしていってほしい。

## 注

- (1) 筆者が「川柳」という言葉をキーワードに検索したところ、〇〇川柳と称される以下のようなホームページが存在した。サラリーマン川柳、介護川柳、シルバー川柳、ホームレス川柳、トイレ川柳、競馬川柳、まあじゃん川柳、ゆいごん川柳、エコ川柳、リハビリ川柳、男女共同参画川柳、高校生川柳、ダイエット川柳、アルバイト川柳、旅行川柳、鉄道川柳、発毛川柳、がん川柳、終活川柳、教育川柳、消費者川柳、環境川柳、子育て川柳、猫川柳等々。要するに職業、社会的役割、社会的事象の数だけ川柳は作られうるということだろう。今後は AI 川柳や少子化川柳も詠まれるに違いない。
- (2) 本稿では数多くの川柳を引用しているが、その際の表記方法として、引用元において縦書きであった作品をすべて横書きの表記に変えている。その際に、原文で上五・中七・下五の間にスペースが無いものについてはそのままスペース無しで表記し、原文で上五・中七・下五を改行している作品については、それらの間にスペースを設ける表記にした。
- (3) アルフォンス・デーケン『よく生きよく笑いよき死と出会う』、新潮社、2003、p.122。
- (4) 「君自身の人格ならびに他のすべての人の人格に例外なく存するところの人間性を、いつでもまたいかなる場合にも同時に目的として使用し決して単なる手段として使用してはならない。」カント（篠田英雄訳）『道徳形而上学原論』、岩波文庫、1976、p. 103。ただし、元の引用文全体にふられていた傍点は除いてある。

- (5) クローズアップ現代+「五七五 つらい現実 笑っちゃえ ～サラリーマン川柳 30年～」  
2017年2月13日(月)放送、<http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3933/1.html>
- (6) 矢野峰人『英文学の特性』、松柏社、1956、p.94。ただし旧字体は適宜、新字体に変えてある。
- (7) クローズアップ現代 No.3616「自虐？反骨？川柳で今を笑う」2015年2月16日(月)放送、  
<http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3616/1.html>
- (8) 高良武久『森田療法のすすめ』、白揚社、2000、p.85-86。
- (9) 日本のお笑い芸人たちのレベルの高さについては、チャド・マレーン『世にも奇妙なニッポンのお笑い』、NHK出版新書、2017、を参照。
- (10) 例えば村上和雄氏は、その著『笑う！遺伝子』（一二三書房、2004）の中で、笑いやプラス思考と遺伝子が働くスイッチのオン・オフとの関係について述べている。
- (11) 井上宏ほか『笑いの研究』、フォー・ユー、1997、p.40-41。
- (12) 堤丁玄坊『スピードマスター川柳の教科書』、新葉館、2012、p.50。
- (13) デーケン、前掲書、2003、p.199。
- (14) 仲畑貴志編『万能川柳デラックス 1000』、毎日新聞社、2005、p.33。
- (15) 同上、p.50。
- (16) 同上、p.220。
- (17) 同上、p.163。
- (18) 高良武久『森田精神療法の実際』、白揚社、1976、p.63。
- (19) 高良、前掲書、2000、p.138。
- (20) 交通安全年間スローガン 毎日新聞社 昭和49年佳作より。  
<https://www.mainichi.co.jp/event/aw/anzen/slogan/archive.html>
- (21) 仲畑編、前掲書、2005、p.21。
- (22) 同上、p.79。
- (23) 同上、p.196。
- (24) 同上、p.223。
- (25) ユーモア精神の定義として、人間を相対化する視点をもつことを挙げたのは、井上宏である。井上宏『笑い学のすすめ』、世界思想社、2004、p.148。
- (26) 仲畑編、前掲書、2005、p.186。
- (27) 同上、p.224。
- (28) 同上、p.176。
- (29) 山藤章二、尾藤三柳、第一生命選『平成サラリーマン川柳傑作選十貫目』、講談社、2000、  
p.79。
- (30) 同上、p.89。
- (31) 仲畑編、前掲書、2005、p.42。
- (32) 同上、p.230。
- (33) 興津要『江戸川柳散策』、時事通信社、1989、p.222。
- (34) 同上、p.222。

- (35) 松井孝典『人類を救う「レンタルの思想」松井孝典対談集』、ウエッジ、2007。
- (36) 仲畑編、前掲書、2005、p.184。
- (37) 同上、p.228。
- (38) 同上、p.220。
- (39) デーケン、前掲書、2003、p.132-133。
- (40) 仲畑編、前掲書、2005、p.68。
- (41) 同上、p.81。
- (42) 同上、p.19。
- (43) 同上、p.203。
- (44) 同上、p.202。
- (45) 日本の代表的な精神療法である森田療法では、悩みを消そうと注意を向ければ向けるほど、逆にその悩みにとらわれ不安が強くなっていく悪循環を「精神交互作用」と名付け、この悪循環からの脱却が神経症克服の要諦であると考えている。
- (46) 井上、前掲書、2004、p.34。
- (47) 山藤（他）選、前掲書、2000、p.86。
- (48) 同上、p.105。
- (49) 同上、p.155。
- (50) 同上、p.56。
- (51) 同上、p.208。
- (52) 同上、p.225。
- (53) 同上、p.18。
- (54) 同上、p.51。
- (55) 同上、p.98。
- (56) 同上、p.183。
- (57) 同上、p.201。
- (58) 同上、p.225。
- (59) キラク介護川柳運営事務局＋近代文藝社編集部編『介護川柳』、近代文藝社、2015、p.16。
- (60) 同上、p.17。
- (61) 同上、p.35。
- (62) 同上、p.38。
- (63) 同上、p.106。
- (64) 同上、p.126。
- (65) 新村出編『広辞苑第六版』岩波書店、2008。
- (66) 富山国際大学地域交流センター『2015年度エクステンション・カレッジ レビュー第4巻』2016。
- (67) 社団法人全国有料老人ホーム協会＋ポプラ社編集部編『シルバー川柳 誕生日ローソク吹いて立ちくらみ』ポプラ社、2012、p.12。
- (68) 同上、p.34。

- (69) 同上、p.35。
- (70) 同上、p.38。
- (71) 同上、p.48。
- (72) 同上、p.70。
- (73) 同上、p.75。
- (74) 同上、p.89。
- (75) みやぎシルバーネット＋河出書房新社編集部編『シルバー川柳 青い山脈編』、河出書房新社、2017、p.4。
- (76) 同上、p.18。
- (77) 同上、p.66。
- (78) 興陽館編集部編『ホームレス川柳』、興陽館、2016、p.126。
- (79) 同上、p.140。
- (80) 同上、p.153。